

白い床の上で、私は両手をつき、脚の間に押し当てられたものから逃げようとしていた。けれど、桐生さんが片膝で私の脚を外側から押さえ込み、閉じることすらできない。

（や、やだ、強すぎ……っ♡でも、逃げられない……っ♡）

「声♡出していいよ♡」

「あぁっ!!♡♡ふう……っ♡」

コード付きのマッサージ器の丸いヘッドが、下着の上からクリトリスへ押しつけられている。布ごと擦り潰されるような振動が頭の奥まで上がってきて、白いホリゾントを照らす光が滲んで見えた。

（だめ、だめ、イっちゃう……っ♡さっき寸前で止められたばかりなのに、また……っ♡）

正面のモニターには、今この瞬間の私が映っていた。ライトに照らされて、下着を濡らしたまま脚を押さえられ、涙のにじんだ目で口を開けている。

（こんな顔、してたんだ……っ♡）

見ていられないのに、目が離せない。

駅から少し離れた雑居ビルの三階。階段だけの古い建物で、上り切った突き当たりに、小さな木の看板が下がっていた。手書きの文字で「K I R

Y U U P H O T O S T U D I O」とある。

（ここで、合ってるよね）

S N Sに載せる写真を撮ってもらおうと、私は撮影スタジオを探していた。

自撮りが苦手で、使える写真をほとんど持っていなかった。さすがにプロフィール写真くらいはきちんとしたものに変えたくて、S N S用の撮影をしてくれる店を探していたとき、偶然このスタジオを見つけた。

店のS N Sに並んでいたのは、どれも静かで、息を止めたような写真だった。窓辺で髪を耳にかける人。椅子に腰かけ、視線だけを伏せた人。

（私も、こんなふうに撮ってもらえるのかな）

笑う直前の口元や、本をめくる指先。

正面を向いてポーズを取っている人はほとんどいないのに、どの一枚にも、その人らしさが写っているように見えた。

撮影を申し込むと、店主の桐生蒼さんから短い返信が届いた。絵文字も褒め言葉もなかったけれど、撮りたい雰囲気について尋ねると、構図や光の話を丁寧に戻してくれた。

「作った顔が苦手なら、そのまま来て。こっちで見つけるから」

最後にそう書かれていて、その言葉に背中を押されるように予約を決めた。

ドアを開けると、外の気配が消えたように静かだった。

白い壁に、黒い額に入った写真が等間隔で並んでいる。床は古い木で、歩くたびに小さく鳴った。受付の机の上には大きなモニターが置かれ、そ

の向こうに桐生さんが立っていた。

（あの人が、桐生さん……？）

スタジオの紹介ページで見た写真より、背が高い。

（写真で見るより、かっこいい）

少し長めの黒髪が耳にかかって、白いシャツの第一ボタンだけが開いていた。整った顔立ちで、少し近寄りがたい感じだ。

ネクタイはしておらず、袖は肘まで折られていて、指の先だけが少しインクで汚れていた。

「いらっしやい。わざわざ来てくれてありがとうがとね」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

声は、想像していたより低かった。低いというより、響きが少なく、静かな部屋にずっと落ちる種類の声だった。私は鞆を握ったまま、入り口で少し立ち止まってしまった。

「緊張してる？」

「少し。撮られるのに、慣れていないんです」

「緊張は悪いことじゃないよ。意識が外を向いてる状態だから。ただ、写真に残るのはそこじゃないってだけだ」

桐生さんは、壁の一枚を指で示した。白い布が風で膨らんだ瞬間を写した写真だった。どこにでもある部屋なのに、その一枚だけ、時間が止まったように見えた。

「写真は、一秒後には消える表情を残すものだ。僕が撮りたいのは、作った顔じゃない。二枚目を作れない、その人の一番本物の一瞬だけだよ」

「……そういうものなんですね」

「うん。だから、僕のスタジオには鏡がない」

言われて、私はあたりを見回した。言われてみれば、この部屋には鏡が一枚もない。代わりに、どこに立っても視界の端にモニターが入るように、画面がいくつも置かれていた。

（どこを見ても、自分の姿が目に入る）

受付に一つ、奥の間口に一つ、壁際に小さいものが二つ。

「鏡やカメラを意識すると、人は顔を作る。でも、モニターで自分を確か

めている時は、かえって素の顔が出るんだ。……ほら」

桐生さんがモニターの電源を入れた。画面の中に、今の私が映っている。入り口で鞆を握ったまま、少しだけ口元がこわばった顔だった。

「今の、君の顔」

「……変な顔してますね」

「うん。でも、それが今の本当の顔だよ。隠してる顔より、ずっといい」

それから、彼は「撮影の前に一つだけやってもらってることもある」と切り出した。受付の椅子を引いて、私に座るように促しながら。

「簡単なポーズの練習。僕が姿勢や視線を細かく直すから、君は自分でよく見せようとしなくていい」

「それで、いい写真が撮れるんですか？」

「うん。撮られ慣れていない人ほど、どう見えるか考えて表情が硬くなる。僕の指示通りに動いた方が、作っていない顔を撮れるよ」

疑うより先に、壁に並んでいた写真が浮かんた。どれも自然で、モデルがカメラを意識していないように見えた。

「難しいことはしない。ただ、途中で恥ずかしくなっても、勝手にポーズを崩さないで。僕が『撮れた』と言うまでは、指示通りに動いて」

「……それも、撮影に必要なんですか？」

「その方が、いい写真が撮れるから」

低い声で言い切られると、私には反論できるほどの知識がなかった。実際、店のSNSに並ぶ写真はどれも綺麗だった。

「……やってみます」

「うん。じゃあ、その丸椅子に座って。肩の力を抜いて」

「ここで、ですか？」

「まずは座った姿勢を見る。顔を少し右へ。顎は引きすぎないで」

室内には冷房の低い音と、どこかで誰かが動く気配があった。丸椅子は硬くて、座ると背もたれがないぶん、自然と背筋が伸びた。

「一つ、先に言っておくね。隣の部屋でアシスタントが作業してる。壁は厚いけど、ここは完全な防音室じゃない。だから、あんまり大きな声は出さないで」

「……はい」

「うん、いい返事」

桐生さんはカメラを手にしたまま、私の正面と左右をゆっくり行き来した。

「背中を伸ばしすぎ。少しだけ戻して。目線はモニターじゃなくて、僕の肩のあたり」

言われた通りに姿勢を直す。自分では何が変わったのかわからないほど細かな指示だった。

（でも、プロに任せた方がいい写真になるよね）

「そう。今の顔がいい。目線だけ、こっち」

顔を上げると、桐生さんが胸の前でカメラを構えていた。

「君は、どう写るか考えなくていい。いい写真にするのは、僕の仕事だから」

「……はい」

その言葉なら信じられる気がした。私は膝に置いていた手を下ろし、促されるまま立ち上がる。

「奥の撮影スペースに行こう」

カシャッ。

不意に鳴った音に、背筋がぞくりと震えて、膝がわずかに緩んだ。

（ひっ……！　びっくりした……）

「うん。今の驚いた顔、すごくいい。行こう」

（また『いい』って言われた）

褒められているはずなのに、断るきっかけを一つずつ塞がれているような気がした。それでも私は、先に歩き出した桐生さんの背中を追った。廊下の壁には、額に入っていない写真が何枚も、画鋲で留められていた。

（どこへ連れて行かれるんだろう）

どれも人のいない風景で、その中の一枚に、開いたドアの向こうの光だけが写っているものがあった。

私はそれを見ているようで見ていないまま、足音だけを追いかけて歩いていた。

奥の部屋に連れて行かれた。天井が高く、奥いっぱい、壁から床へ継ぎ目なく続く真っ白なホリゾントが広がっている。照明機材が三脚に載っ

て並び、その真ん中に、大きなモニターが置かれていた。

（外とは、空気の重さまで違う）

スタジオの中はひんやりとしていて、白い床は磨き上げられていて、歩きたびに自分の足音が返ってきた。

空気の中に、かすかに機材の熱と乾いた布の匂いが混ざっている。

「ここがメインの撮影スペース。ホリゾントっていうんだ。ここに立って」「はい」

白いホリゾントの中央で立ち止まると、桐生さんはカメラを構えたまま、ゆっくりと後ろに下がった。

「いい立ち位置。自分がどう見えるか、モニターを見てみて」

振り返ると、画面の中に私の全身が映っていた。まだシャッターは切られていないのに、もう映像が出ている。モニターの中の私は、どこか焦点のぼやけた、ふわふわした顔をしていた。

（……これが、力を抜いた顔……？ 変な顔してる……）

「緊張が抜けた顔だ。被写体としては、理想的な状態」

桐生さんがライトを一つ、私に向けた。白い光が顔から足元までを撫でるように滑っていく。熱が肌の上を這って、少しずつ体温が上がっていくのがわかった。

（まぶしい。でも、目を逸らせない）

もう一灯、横から。もう一灯、後ろから。三つの光が重なって、影が足元に丸く落ちた。

「これから何をするか、先に説明するね」

「はい」

「撮影には段階がある。まず表情。次に上半身と下半身。それから、触れた時の反応を見て、最後に仕上げ。その順番で進める。どう見えるかは僕が考えるから、君は言われた通りに動いて。……いいね？」

「はい」

「うん」

カシヤッ。

「ひあっ……♡」

不意のシャッター音に肩が跳ね、息を呑んだ。さっきより音が近く、白い部屋の中へ鋭く響いた。

「表情の記録から始める♡顔は、体の中で一番正直な場所だから♡」

そう言って、彼はカメラを片手に近づいてきた。もう片方の手が、私の頬に触れる。指先は冷たくて、少しだけざらついていた。

「顎、少し上げて♡」

指先が顎の裏をなぞり、首筋へと下りていく。鎖骨のくぼみで少し止まって、それから肩の上をゆっくりと滑った。

「ひ……っ♡」

「力が入ってる♡そのままだと、表情が硬くなる♡」

首の筋に沿って、指の腹が上下する。喉元で、彼の指が少しだけ強く押された。

「ああ……っ♡」

「うん♡ここ、弱いんだ♡」

「ち、ちがいます……っ♡」

カシャッ。

「ひっ……♡」

シャッター音が鳴るたびに、触れられた場所の感覚まで鮮明になる。